

オンライン大学における初年次必修科目の学習支援実践とその年次変化

Developing and Evolving Support Practices for First-Year Students in an Online University

加藤 泰久

Yasuhisa KATO

東京通信大学 情報マネジメント学部

Department of Information and Management, Tokyo Online University

Email: kato.yasuhisa@internet.ac.jp

あらまし：オンライン大学における初年次必修科目の履修状況を、開学8年間の年次推移から分析した。特に、学生の孤立感や中途離脱の課題に対し、オリエンテーション内容の充実、同期型イベントの開催等による支援を試みてきた。入学者層の多様化や環境要因により一律の支援策は困難であるが、柔軟な対応と継続的な検証により、学習の初期段階で学生を学修軌道に乗せる実践知が蓄積されつつある。

キーワード：初年次教育、eラーニング、オンライン大学、学習者支援

1. はじめに

2018年度から2025年度までに実施された、社会人の学び直しを主軸とするオンライン大学における1年次必修科目の授業実践を振り返り、その内容を分析する。オンライン大学では、オンライン学習に必要なスキルの習得が求められ、学習意欲は継続的な学修の重要な要因となっている⁽¹⁾。本講では、ドロップアウトをなるべく減らし、学習継続率を高めることを目指した学習者支援の取組について考察する。

2. 関連研究

高等教育機関のオンライン学習環境におけるドロップアウトに関する研究は今まで多く行われてきているが、各大学の状況が大きく異なるのが現状であり、様々な取組が行われてきた⁽¹⁾。特に初年次オンライン学習者の定着・成果向上には、多面的な初期支援が効果的とされる。音声付き動画による導入支援が満足度と成績を向上させたことが示され⁽²⁾、体系的オリエンテーションにより継続率が7%向上したことが報告されている⁽³⁾。また、同期型授業による交流促進がエンゲージメントに寄与したと述べている⁽⁴⁾。学習分析による個別介入が脱落率を抑制したことが示され⁽⁵⁾、時間的困難が離脱要因であることから、柔軟な支援の必要性が主張されている⁽⁶⁾。これらは初期段階の多角的支援が学習継続に不可欠であることを示唆しているが、多様な学生にオンライン大学としてどう対応していくかは大きな課題の一つとなっている。

3. オンライン大学における学習環境

本講では2025年度1学期における1年次の必修科目についての学生の履修パターンと学生支援の実践について2018年度からの授業実践と比較して述べ

る。学事暦上、2018年度から2020年度は、全配信期間は7週間、2021年度から2023年度は、8週間、2024年度と2025年度は、7週間と2日となっている。

4. オンライン大学での授業実践

1年次必修科目の2018年度から2024年度⁽¹⁾及び2025年度の各1学期における学生の各回の学習率を図1に示す。3年次編入学生及び過年度履修の学生を除き、各年度における1年次入学生のみを対象にしている。2025年度については、単位認定試験が未完了のため、最大の予測値である。図1において、2024年度の授業回の第1回から第6回に対して、どの回もほぼ、2018年度から2024年度の平均に近いかあるいは少しよい数字となっており、第7回及び第8回に関しては、過去最高の学習率となった。ここで学習率とは、第1回第1講の映像教材(約15分)を最後まで視聴した学生を100%とし、以降その学生の中の何%が各回の受講または単位認定試験を完了したかについて示した数字である。例えば、2025年度の第8回については、学習率は約85%であるが、これは、第1回第1講の15分の映像教材の履修を終えた学生全体の約85%の学生が第8回の履修を完了し、残り約15%の学生については第8回が未完了であるということを示している。また、単位認定試験は全体の授業回の2/3以上の出席が受験条件であるため、単位認定試験の学習率(受験率)は第8回の学習率よりも通常高くなっている。

5. 考察

図1に示した通り、2025年度は第1回から第6回まで、過去の年度と比較して、平均的で若干学習率がよくなり、第7回及び第8回においては過去最高の学習率を達成した。

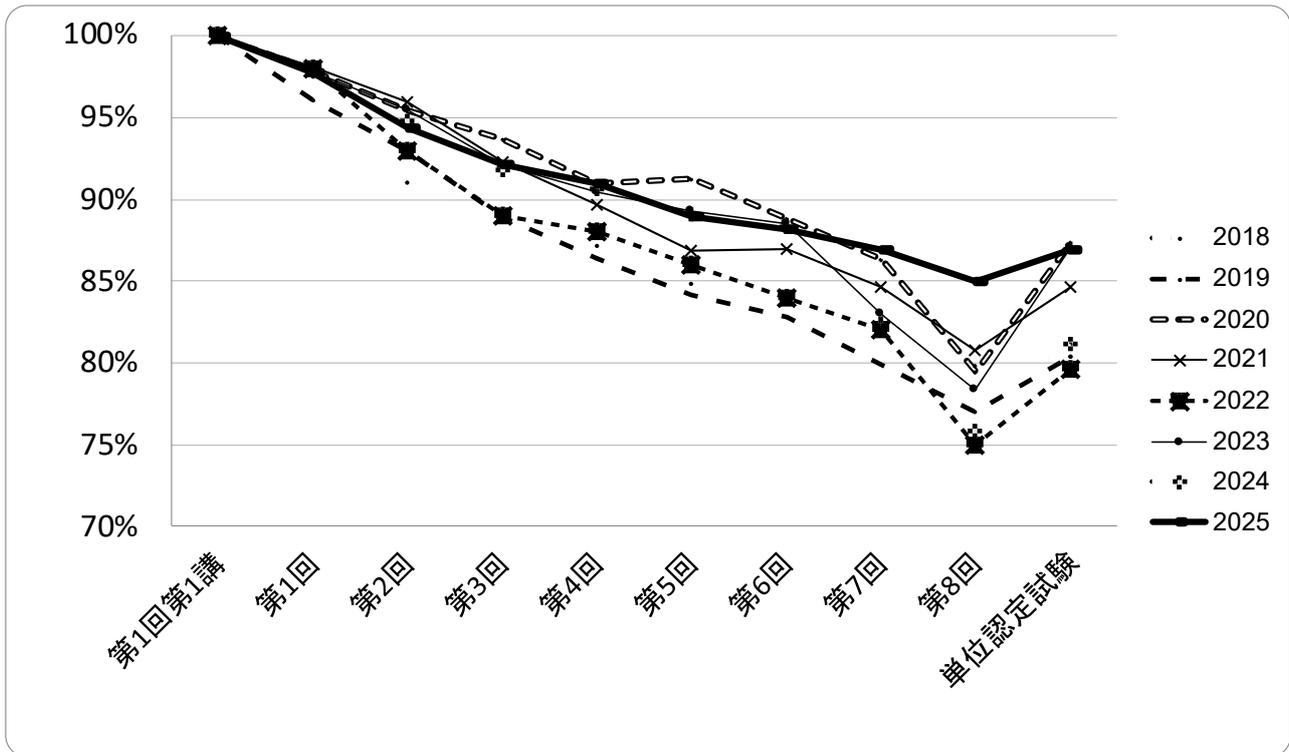


図 1 各授業回の学習率の推移

次に、開学の2018年度以降で、今年度が第7回及び第8回の学習率が一番大きい結果となった。つまり、途中でつまづいて進められなかった学生の比率が最小という結果となり、特に、第8回については、7年間の平均値よりも7ポイント上昇した。今年度のオリエンテーション教材の改善等も影響が出たものと考えている。

6. おわりに

開学の2018年度以降、若年層の新入生（高校からのストレート入学）が増えたことにより、ゴールデンウィークの休日に入る前の4月末には、2024年度より、Teams等を利用した新入生向けの同期型の学生と教員との交流会を開催し、疑問や質問をその場で解決する試みを行ってきた。2025年度も約30名が参加したが、このような同期型のイベントの効果については、今後効果の検証が必要であるが、参加した学生には好評であった。

今後は、新入生オリエンテーションでの学び方の説明の改善・強化、アカデミックアドバイザーから学生にメッセージを送るタイミング・内容・システム化等を検討し、学習者支援の活動計画を随時見直し、さらなるドロップアウト率の低減及び授業完遂者増を目指すこととしたい。

謝辞

本研究の一部は JSPS 科研費(22K12303)の助成を受けたものである。

参考文献

- (1) 加藤泰久：” オンライン大学における学生の学習パターンの分析と学習者支援の試行”，教育システム情報学会全国大会（2024）
- (2) Taylor, J. M., Dunn, M., & Winn, S. K. (2015). Innovative Orientation Leads to Improved Success in Online Courses. *Online Learning*, 19(4).
- (3) Stoebe, A., & Grebing, R. (2020). The Effect of New Student Orientations on the Retention of Online Students. *Online Journal of Distance Learning Administration*, 23(2).
- (4) Majewska, A. A., & Vereen, E. (2021). Fostering student-student interactions in a first-year experience course taught online during the COVID-19 pandemic. *Journal of Microbiology & Biology Education*, 22(1), 22.1.29.
- (5) Bañeres, D., Rodríguez-González, M. E., Guerrero-Roldán, A.-E., & Cortadas, P. (2023). An early warning system to identify and intervene online dropout learners. *International Journal of Educational Technology in Higher Education*, 20(1), 3.
- (6) Xavier, M., Meneses, J., & Fiuza, P. J. (2022). Dropout, stopout, and time challenges in open online higher education: A qualitative study of the first-year student experience. *Open Learning: The Journal of Open, Distance and e-Learning*. Michael Beaudoin et al.: “Online Learner Competencies (The Ibstpi Book Series)”, Information Age Publishing (2013)